

産湯相承事

日興之を記す

御名乗りの事、始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。後に日蓮と名乗り有りし御事は、悲母梅菊女は^{尊女の御名なり}平の畠山殿の一類にて御坐すと云云。法号妙蓮禅尼の御物語之有る事は、我に不思議の御夢相有り、清澄寺に通夜申したりし時、汝が^{こころざし}志真に神妙なり、一閻浮提第一の宝を与へんと思ふなり。東条の片海に三国大夫と云ふ者あり、是を夫と定めよと云云。七歳の春三月廿四日の夜なり、正に今も覚え侍るなり。我父母に後れ奉りて已後、詮方無く遊女の如くなりし時御身の父に嫁げり。有る夜の^{聖人托胎の口伝}靈夢に曰はく、叡山の頂に腰をかけて近江の湖水を以て手を洗ひ、富士の山より日輪の出でたまふを懐き奉ると思ひて、打ち驚きて後月水留まると夢物語を申し侍れば、父の大夫我も不思議なる御夢相を蒙るなり。虚空蔵菩薩^{みめよきちご}貌吉児を御肩に立て給ふ。此の^{聖人上行菩薩の口伝}少人我が^{並びに是生の口伝}為には上行菩提薩埵なり。日の下の人^{おこと}の為には生財摩訶薩埵なり。亦一切有情の為には行く末三世常恒の大導師なり。是を汝に与へんとの給ふと見て後、御事懐妊の由を聞くと語り相ひたりき。さてこそ御事は聖人なれ。

又^{うまれ}產生たまふべき夜の夢に、富士山の頂に登りて十方を見るに、明らかなる事^{たなごころ}掌の内を見るが如く三世明白なり。梵天・帝釈・四大天王等の諸天悉く来下して、本地自受用報身如来の垂迹上行菩薩の御身を凡夫地に謙下したまふ。御誕生は唯今なり、無熱池の主阿那婆達多竜王・八功德水を持ち来たるべし、当に産湯に浴し奉るべしと諸天に告げたまへり。仍って竜神王即時に青蓮華を一本荷ひ来たれり。其の蓮より清水を出だして御身に浴し進らせ侍りけり。其の余れる水を四天下に灑ぐに、其の潤ひを受くる人畜・草木・国土世間悉く金色の光明を放ち、四方の草木華^{はなひら}発^{このみ}き菓成る。男女座を並べて有れども煩惱無し。淤泥の中より出づれども塵泥に染まざること、譬へば蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し。人・天・竜・畜共に白き蓮を各手に捧げて、日に向かって「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、唯我一人、能為救護」と唱へ奉ると見て驚けば、則ち聖人出生したまへり。「每自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就仏身」と苦我滞き玉ふ。我と少し未寝し様なりし時、^{諸天頌の口決}梵帝等の諸天一同音に唱へて言はく、善哉善哉善日童子、末法教主勝釈迦仏と三度唱へて作礼而去し給ふと寤に見聞きしなりと、慥かに語り給ひしを聞こし食し、さては某は日蓮なりと言ひしなり。聖

人重ねて曰ふ様は、日蓮が弟子檀那等悲母の物語と思ふべからず、即ち金言なり。其の故は予が修行は兼ねて母の靈夢にありけり。日蓮は富士山しねん自然の名号なり。富士は郡名なり、実名をば大日蓮華山と云ふなり、我中道を修行する故に此くの如し。国をば日本と云ひ、神をば日の神と申し、仏の童名をば日種太子と申し、予が童名をば善日、仮名は是生ぜしやう、実名は即ち日蓮なり。

久遠下種の南無妙法蓮華經の守護神の、我が国に天下り始めし国は出雲なり。出雲に日御崎ひのみさきと云ふ所あり。天照太神始めて天下り給ふ故に日御崎と申すなり。

我が釈尊法華經を説き顯はしたまひしより已来このかた十羅刹女と号したてまつる。生仏法界一如の口伝生仏法界一如の口伝十羅刹と天照太神と釈尊と日蓮とは一体異名にして、本地垂迹の利益広大なり。日神と月神とを合して文字を訓ずれば十なり。十羅刹女と申すは、諸神を一体に束ね合はせたる深義なり。日蓮の日は則ち日の神、昼なり。蓮は即ち月の神、夜なり。月は水を縁とす、蓮は水より生ずる故なり。又是生とは日の下の人を生むと書きたり。日蓮本門下種の口伝天上天下一切衆生の主君なり、父母なり、師匠なり。今久遠下種の寿量品に云はく「今此三界皆是我有主君の義なり 其中衆生悉是吾子父母の義なり 而今此处多諸患難國土羣末 唯我一人能為救護師匠の義なり」と云へり。三世常恒じやうごうの日蓮は今此三界の主なり。「日蓮大恩、以希有事、憐愍教化、利益我等、無量億劫、誰能報者」すいのうほうしゃなるべし。

若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中にも、日文字を名乗りの上の字に置かずんば、自然の法罰を蒙ると知るべし。予が一期の功德は日文字に留め置くと御説法ありし俣、日興謹みて之を記し奉りしなり。

聖人言のたまはく、此の相承は日蓮嫡々一人の口訣、唯授一人の秘伝なり、神妙神妙と言給ひて留め畢んぬ。